

日蒙語のボイスに関する対照研究

総合文化学専攻 日本文化理解プログラム
G0217006 ドロマスロン

要旨

日本語とモンゴル語は語順をはじめ、文法的にたくさん類似などところがあるが、類似しているからこそ、かえって分かりにくい部分が存在し、モンゴル人日本語学習者が日本語を難しいと感じることがある。自分自身、モンゴル人日本語学習者として、今まで日本語を学んできて一番難しいと思った部分、日本語でコミュニケーションを行う際に一番迷っていた部分はやはり、本研究で論じるボイスの部分である。特に、受身表現の一種類である間接受身（迷惑受身）については、非常に分かりにくく感じた。

本論では、日本語とモンゴル語の語彙的・文法的ボイスを中心に対照研究を行った。その範囲は、日本語の自動詞・他動詞の区別をはじめ、受身表現や使役表現、また再帰表現などの領域に及んだ。モンゴル人日本語学習者はボイスに関連する部分で判断に迷うことが多いと考えられ、そのような点において、本研究がモンゴル人日本語学習者の役に立つことができると考えたことが研究動機であった。

日本語の語彙的ボイスについては、寺村(1982)に基づいて、自動詞と他動詞の派生、形態的対立が存立しているものと存立していないものについて、それぞれ考察した。そして、モンゴル語の語彙的ボイスについては、モンゴル語の自動詞と他動詞の定義、自動詞と他動詞の派生、その区別する方法について論じた。また、日本語の相対自他動詞と対応するモンゴル語の動詞を示す一覧表を作り、日本語の自動詞・他動詞の多くがお互いに相対的派生関係にあるのに対して、モンゴル語の場合は相対自他動詞が存在しないことについて論じた。

次に、日本語の文法的ボイスである受身・使役表現についても、多くの構造的相違点が存在しすることも、モンゴル人日本語学習者にとって、もう一つの難問と思われる。日本語とモンゴル語の文法的ボイスについては、外形と語順の観点から考察した。構文論的にはほぼ同じ語順の形であり、日本語助詞の「に」に対応するモンゴル語助詞の「-d-」である。種類のほうから見ると、日本語の受身表現は直接受身と間接受身と大きく二つに分類されるのに対して、モンゴル語の場合はただ一つの直接受身しか存在しない。日本語とモンゴル語の文法的ボイスについて、それぞれ寺村(1982)と Juha A. Janhunen (2012) にもとづき、日本語のボイスとモンゴル語のボイスの定義や形に関する比較を行った。加えて、日本語の自動詞・他動詞の派生と対比して、モンゴル語の自動化辞と他動詞化辞、使役接辞と受身接辞の派生や変化について論じた。モンゴル語の語彙的ボイスにおいて自動詞の範囲が狭いことは、文法的ボイスとして用いられる受身接辞が自

動化辞として機能とするためであると考えられる。

最後に、モンゴル人の日本語学習者が判断に迷うことが多いと考えられる日本語とモンゴル語の再帰表現についても考察した。モンゴル語の再帰表現は比較的幅広く、再帰表現文の中に自分自身のこと、あるいは自分自身に関係することを直接表すことができるが、日本語には必ず「自分」「自身」などの言葉を使う。このような相違点のために、モンゴル人日本語学習者は、日本語発話・文章作成において混乱することが多いと思われる。再帰表現が非常に広範囲にわたって義務的に文法化されているモンゴル語と違って、日本語の再帰表現は一部の動詞に限られている。

以上を総括して、自分自身を含めてモンゴル人日本語学習者が判断に迷う日本語ボイス表現についての対照研究を、日本語学習の世界に応用的に活用していくための展望を行い本研究を締めくくった。